魅力ある授業［取材］

新しくなった実習室で必要な技術と医療人としての素養を確実に身につける

病院 講師 成石 浩司（なるいしこうじ）

「ラバーダムは、歯の根っ子を治療する時に、どうしても歯が唾液で汚染されたり、薬液が口の中に漏れてしまうので、治療する歯以外をラバーで覆って、清潔に安全に治療するために行います。このとき実際の診療場面を想定して、確実に、そして清潔に器具を操作することの大切さを学んでもらいます」と湯本先生。

「模型実習でいろんな失敗をしたらいいと思います。初めから全て上手く行える人はいませんし、失敗からその原因や理由を学ぶことの方が多く、何が重要で、何に注意しなければならないかなどのポイントに気付くはずですから」と話す湯本浩通先生。湯本先生は歯学系OSCEの実施責任者でもあります。

一人1台 マネキン&モニターの充実設備

歯内療法学の模型実習に伺いました。

プラスチックの工具箱のようなケースを携えて、次々に着席する歯学部歯学科4年生のみなさん。机には1人1台のモニターとマネキンがあり、机と机は飛沫防止のためのアクリル板で仕切られています。実習に使う器具も人数分配布されて、実習が始まりました。

これまでは大型のスクリーンやモニターを見ながら説明を聞くスタイルだったそうですが、実習室が改修され、各自がマイモニターで手順を確認しながら実習が進みます。成石先生の手元にもカメラがあり、先生の周りに集まらなくてもモニターを通して手技を見ることができます。

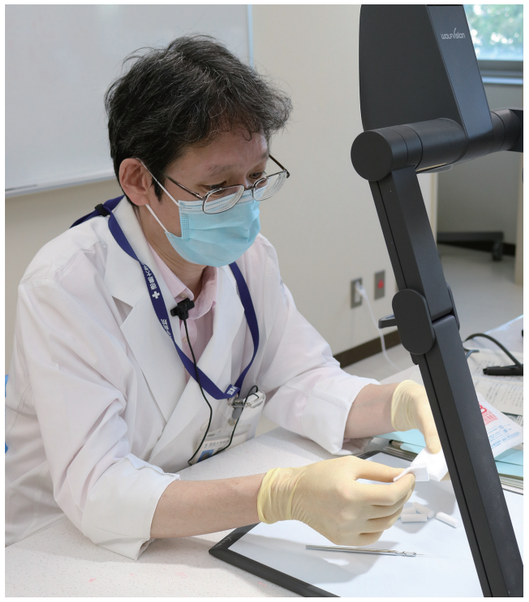
この日行われていたのはラバーダム装着実習やブローチ綿栓実習など。ただ「できればいい」というのではなく、使用する器具を清潔に扱いつつも「この作業は3分以内で！」と時間制限もあって、「不器用な人は歯学部に向かないのでは…」と思ってしまうほど。

こうした素朴な疑問や実習内容について、実習中の成石先生に代わり湯本先生にお話を伺いました。

「始めは得手不得手あるんですが、経験を重ねると最終的は同じレベルになりますので、その点に関しては心配ないです」。手先の器用さといった初歩的なところで躓く人は、ほぼいないそうですが、問題は試験です。歯学科生は5年生の10月から病院で患者さんに接する臨床実習が始まるため、9月にはOSCE（オスキー）という客観的臨床能力試験を受けます。その試験にラバーダム装着の項目もあり、試験では5分以内に行うことが求められるのだとか。当日、緊張して装着に時間がかかってしまうことも想定し、普段から3～4分でできるよう練習しているそうです。

実習を通して 医療人としての素養も学ぶ

実習のところどころで、成石先生から「ここ、よく試験にでますよ」という声かけもしばしば。湯本先生によると「この試験というのは国家試験。国家試験はマークシートのペーパー試験なんですが、実は臨床実習の前にはOSCE、6年生になると病院で実際に患者さんに治療しているところをチェックされ、医療人としてふさわしい言葉遣いや態度であったかも含めて試験されます。また技能についても、マネキン模型を使って時間内に言われたことができるかどうかが厳密に試験されます。これら複数の試験をクリアして、ようやく国家試験への道が開かれることになります」。技能はもちろん、振る舞いまでも評価対象になるとは！「患者さんへの説明の仕方や手洗いからはじまる清潔操作、そして準備から後片付けまでもチェックされますので、これから2年間かけて、そうしたことも含め、習得していくことになります」。



成石先生。模型実習には44名の学生が参加。今回の歯内療法学に加えて、歯石除去や歯周外科治療などの「歯周治療学」もあり、計13回の実習を担当しています。

困ったらその場ですぐに 相談できる〝ライター〟という 頼もしい存在

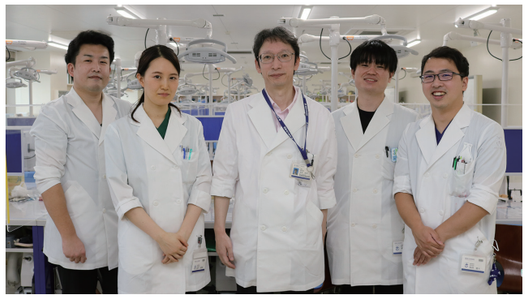
実習には、〝ライター〟と呼ばれるサポートの先生が5名いて、学生たちの様子を見て回りながら、学生からの呼びかけに即座に対応されていたのも印象的でした。

「歯学部は教員と学生間の距離が近いのが校風というか、他の大学から研修医として来られた先生からもよく言われます。ライターの先生方に対しても友達感覚というか、お兄さん、お姉さんみたいな感じかもしれませんね」。

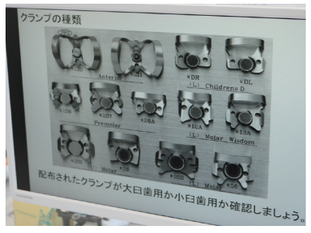
「わからない」、「できない」という場合、すぐにライターの先生を呼んで、積極的に教えてもらっていて、このオープンな雰囲気が決められた実習時間内での技術の取得を後押ししているようでした。

歯学部ではこうした学びやすい環境作りのために教員自身がFaculty Development（FD）という教育の仕方やプログラム構成などを学ぶ講習会に参加したり、学生と教員、学部長などを交えた懇談会も開いて学生の意見や要望を取り入れるなど、普段から様々な工夫を行っているのだとか。実習に関するアンケートを無記名でとって、各診療科へフィードバックするといった改善策も積み重ねるとのこと。

「コロナの影響もあるとはいえ、将来、『○歳～○歳くらいの歯科医師はコロナのせいで○○が出来ない』と言われることがないよう、学生の学びを一番に考え、臨床を想定した充実した実習にできるようにしてきたいと考えています」という湯本先生。どこかアットホームで温かな交流のある実習は、人間味のある医療人を作るために役立っているように思いました。



ライターの先生方。写真左から生田貴久先生、木戸理恵先生、成石先生、植村勇太先生、秋月皆人先生。



小さい金具がたくさん。実習中、誤って落としても、手でとってはダメなんだとか。思わず手で摘まんでしまいそうになりますが、不潔なので絶対NG。実習ではこうした一挙手一投足から教わります。